HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古典期前期マヤにおける国家形成の研究 : 三足円筒土器と「テオティワカンの影響」 [全文の要約]
Author(s)	今泉, 和也
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13395号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80561
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Kazuya_Imaizumi_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：　今泉　和也

学位論文題名
古典期前期マヤにおける国家形成の研究
― 三足円筒土器と「テオティワカンの影響」 ―

現在、古代マヤ社会における国家形成は古典期前期初頭に達成されると考えられている。そうした中、マヤ考古学では発掘調査の進展によって先古典期後期に関する情報が増加し、国家形成に至る社会の複雑化の過程や国家の成立前夜の様相について明らかにしようとする動きが活発化している。

国家形成期である先古典期後期後半から古典期前期初頭にかけては社会的大変動が起きた時期でもあることが分かっている。この時期に当時の大都市の多くが衰退する中でティカルとカラクムルといった限られた都市だけが存続し、国家として成立した。一方で続く古典期には少なくとも 30 を超える都市国家が林立したと考えられているため、マヤ社会における大部分の政治体にとっては古典期前期が国家形成期であるとして捉えることができる。

この大部分の政治体群がいかにして国家の体裁を整えていったかについては中小遺跡の調査不足を起因として考古学からは明らかにされていない。一方で碑文学からは、古典期前期においていち早く国家段階へと至ったマヤ中部低地の主要都市であるティカルが軍事力を背景に、その周辺の都市において新王を擁立するといった帝国主義的な対外政策を取り始めたことが指摘されている。このティカルにおける積極的な対外政策の発端は西暦 378 年のティカルへの「異国人の到着」とされており、同時期に異文化様式遺物がマヤ地域にて広く見られるようになる「テオティワカンの影響」と呼ばれる現象が生じる。この外部様式の遺構や遺物の分布に見られる考古学的な現象の実態についてはこれまで具体的に明らかにされておらず、また古典期前期における大部分の政治体群の国家形成との関係の中で解釈されることがなかった。

これを受けて、本論では「テオティワカン様式遺物」の中で、三足円筒土器、高台付き碗、土製蓋、シアタータイプ土器、タルー・タブレロ建築を対象とし、遺構・遺物といった物の移動の可否や日用品・儀礼用品といった取り扱いに関して社会的性格の異なるこれらの資料を対象として分析を行うことで、それぞれの資料が示す「テオティワカンの影響」の違いを明らかにした。

分析の結果、マヤ太平洋岸域とマヤ南部高地（南部地域）では対象の遺物・遺構がテオティワカンとの技術的な関連性を示し、他方でマヤ中部低地とマヤ南東部低地（北部

地域）では在地土器製作に関わる伝統的な技術が継続して用いられていたことが分かった。そのことから南部地域においてはテオティワカン人の工人を含むヒトの移動があったことが推定できる一方で、北部地域ではテオティワカン人の移住はなかった、あるいは非常に限られた人数のアッパークラスのヒトの移動があったと推定することができた。少なくとも北部地域では土器製作や建築に関するテオティワカン人の技術者の移動を含む大規模な移住はなかったと考えられる。

従来考えられてきたように「テオティワカンの影響」としてテオティワカンとの直接的な関係の中でマヤ的な「テオティワカン様式遺物」がマヤ北部地域の諸都市に広がったのではない。テオティワカンとの強い繋がりを有するに至ったティカルを中継として、テオティワカン–ティカル的な折衷型の遺構・遺物がティカルとの社会関係の中で周辺の各都市に広がったのである。この社会関係とは新体制のティカルによる周辺の都市への遠征と新王の擁立による主従関係を伴う都市国家連合の成立に関する諸関係であり、従来指摘されてきた「テオティワカン様式遺物」の偏在性とは各都市におけるティカルとの主従関係と同盟都市国家連合内の力関係、そして所属する連合の違いを反映したものである。

古代マヤ社会における国家形成期は二時期あり、二度目の国家形成期は古典期前期後半にティカルの積極的な対外政策によって周辺の政治体の二次国家形成として推し進められた。この二次国家形成期の中で北部地域における「テオティワカンの影響」とはテオティワカンの支配領域ではなく、新体制下のティカル都市国家連合の領域を示す指標である。また南部地域ではテオティワカン人による征服とテオティワカン人の大量流入という、マヤ外部との諸関係において二次国家形成が生じた。このように古代マヤ社会における古典期前期の二次国家形成は北部地域と南部地域で異なる過程によってそれぞれ進行したと結論付けた。

以下に部・章ごとに要約を示す。

Ⅰ部１章では「古代マヤ社会に対する国家の視点」と題し、先行研究において古代マヤ社会をいかにして初期国家段階の社会として捉えてきたかについて説明を行った。

古代マヤ研究において、特に古典期におけるマヤ社会がどの程度の複雑さを有していたのかは古くからの関心ごとであった。研究史の中ではマヤ社会には一大帝国が存在したとする説から首長制段階であったとする説まであるが、現行のマヤ文明観では先古典期終末期から古典期前期初頭にかけて国家段階に移行したと考えられている。これを受けて、１章では最初にメソアメリカにおけるマヤ地域の所在と周辺との関係、そして古典期前期という時代背景について概観した。そして古代マヤ文明における国家形成を取り扱うために、古代マヤ研究においてどのような過程と基準によって古典期のマヤ諸都市が国家として認められようになったのかについて、研究史全体の流れにおけるマヤ社会像の解釈の進展、碑文解読と碑文学研究の進展、考古学調査と考古学研究の進展のそ

れぞれの文脈の中で概観した。そうすることで現行の古代マヤ研究において、古典期マヤ社会が国家段階であるとされていることを最初に確認した。

1 章のまとめではメソアメリカにおける古典期マヤ社会の所在と時代背景を確認し、研究史上の潮流の変化、碑文学研究の進展、考古学研究の進展のそれぞれに対応して古典期のマヤ社会像が変化してきたことを確認した。それは研究史の初期においてマヤ社会は儀礼センターとして扱われ、1960 年代以降の発掘調査と碑文解読の進展によって社会像の修正を促され、1990 年代までにマヤ社会は国家段階にあったと考えられるようになったということである。このマヤ研究史におけるマヤ文明観の変遷を概観することから分かることは、古典期マヤが歴史時代として捉えられ、古典期マヤ社会が国家であるという視点をもつに際して碑文学と考古学の協業が行われてきたということである。

国家の指標としては、①3 階級以上の社会階層　②世襲的国王と法体系の成立　③貢納、徴兵、労役の賦課　④行政区と官僚　⑤アーバン・センター（宮殿）　⑥職業の専門化　⑦軍隊（植木 1996; 31-35）が挙げられている。古代マヤ研究においては、この内の世襲的国王と行政区と官僚については碑文学研究から多くが指摘されている。他方で社会階層や宮殿、職業の専門化については考古学研究によって指摘されている。

つまり碑文学研究による王族･エリートのリネージに関する碑文記述や紋章文字に見られる領域支配に関する指摘がマヤ社会を国家段階と判定する上での重要な判断基準を提示している。一方で考古学研究においては遺構・遺物の分析から階層制の存在を指摘し、特に宮殿建築の有無を判断基準として提示している。これらの両研究成果を合わせることで古典期マヤ社会を国家段階として位置付けていると結論付けた。

Ⅰ部 2～4 章では、国家形成について論じるために、国家、原初国家、二次国家についてのそれぞれ定義を確認し、古代マヤ社会、特にティカルに関してどの用語が適切であるのかを確認した。

Ⅰ部 1 章では現在のマヤ研究において古典期マヤ社会が国家段階にある社会として捉えられていることを確認してきた。本論では古代マヤ史における国家形成期を 2 期に分けて考え、先古典期後期後半から古典期前期初頭(400 B.C.-A.D. 250)を一番目の国家形成期とし、古代マヤ史における「原初国家（pristine state）の形成期」として捉える。古典期において原初国家の影響を受けて生じる二次国家形成と対比し、「一次国家の形成期」と呼ぶこともできる。3 章にてこの原初（一次）国家の形成期におけるマヤ社会の様相について言及するにあたり、2 章では人類学における原初国家という用語について定義を確認した。そして原初国家が形成される契機と国家形成に関する理論的枠組みについて概観し、原初国家が成立するための理論的な過程について考察を行った。その中でこれまでに先古典期後期から古典期前期初頭にかけてのマヤ社会の国家形成過程を説明するための国家形成理論は提示されていないことを示した。この時期のマヤ

社会には大規模な社会が複数存在していたにも関わらず大部分の社会は国家段階に到達しないばかりか放棄され、一部の社会のみが原初国家として次時期にも継続して発展を遂げた。この第一次国家形成期に原初国家としての枠組みの中で国家段階に至った限られたマヤ社会は、先に示した代表的な理論に見られるようにいくつかの内的・外的条件を複合的な契機として国家段階に至ったと考えられると結論付けた。

Ⅰ部3章では「先古典期～古典期初頭における原初国家形成」について記述した。マヤ地域では先古典期後期までに多くの都市が社会の複雑化を果たしていたが、先古典期後期末にそれらの都市が放棄され、続く古典期初頭に存続した都市だけが国家段階に移行したことが分かっている。ここでは先古典期におけるマヤ社会の様相について概観し、古典期初頭までに国家段階に至ったと考えらえている都市が如何なる国家形成の契機となり得る条件を有していたかについて、前章で確認した国家形成の契機となる諸条件と国家形成モデルに基づいて検討を行った。特に古典期前期初頭に原初国家としていち早く国家段階に至ったマヤ中部低地の社会、ティカルとカラクムルにおける国家形成の契機について検討を行った。

前章で見てきたように、マヤ地域における国家形成においても複数の理論や複数の契機が組み合う形で原初国家が成立したと考えられる。特にこの第一次国家形成期のマヤ中部低地では、河川・湖沼といった水資源の限定性と熱帯雨林気候がもたらす乾季における水不足の問題の解決策としての水利に関わる公共事業が一つの大きな契機になったと考えられる。特に天然の水資源が存在しない都市中心部に大人口が集中することで深刻な水資源の不足が生じるため、文化生態学的モデルで説明されるような環境への人類社会の適応が一つの契機となっており、人口・公共事業の二つの条件は互いに作用し合う関係であると言えよう。

この人口の増加と公共事業の実施は社会の複雑化を推し進める要因として機能したと考えられる一方で、古典期前期初頭に原初国家の形成を強く促したのは長期的大干ばつに起因する限定的資源をめぐる闘争であると考えられる。社会同士の対立と衝突の結果、勝者である社会には社会経済上の求心力が生じ、また別社会の集団の流入という形での急激な人口増加によって管理機構の構築が急務となった蓋然性が高い。つまり古代マヤ社会の原初国家形成過程として、特定の環境に起因する人口増加とその圧力、公共事業の実施という条件下で成長した社会が、干ばつに起因する闘争というトリガーによって国家形成が促されたと捉えることができると結論付けた。

Ⅰ部4章では「マヤ社会における国家モデルと二次国家」と題して記述を行った。この章では二次国家の概念についての定義を確認し、古典期における各マヤ社会の外部との関係性について概観した。先行研究において古典期マヤ社会に対して提示された国家モデルは大きく3つあり、現在は碑文学研究成果として提示された「優越王制度」が現行の古代マヤ研究における定説となっている。この優越王制度とは如何なるものなのかについて人類学研究成果から確認し、古典期マヤ社会が全体として二次国

家形成を生じる社会環境にあったことを指摘した。

本章のまとめとして、原初国家と二次国家の二つの概念は、その国家が独立的に成立したのか既存国家の影響を受けたのかという点で区分されると考えた。それは最も単純な形で言い換えるのであれば、とある一地域において最初に成立した国家であるか、次点にて成立した国家であるかの違いである。

地域的な統一国家が出現する場合では原初国家は周辺社会を副都市やさらに下位の単位として一つの統治システムの中に取り込んでいくため二次国家形成は生じることはない。しかし古代マヤ社会のように小政体が林立し、中央集権化の度合いが小さく分散的な支配が行われていた場合においては既存国家の影響の下で一定の自治権を有する都市国家が成立する二次国家形成が生じやすい傾向にあると結論付けた。

I 部 5 章では「古典期前期における「テオティワカンの影響」と二次国家国家形成」として、本論における主題的なテーマについて記述した。

マヤ地域では古典期を通して主要な都市国家を中心として大小様々な政体群によって複雑なネットワーク型社会が形成されていた。特に古典期前期においてはマヤ地域における原初国家であるティカル、カラクムルからだけではなく、中央メキシコ高原域に位置するテオティワカンという他の文明域にて生じた当時のメソアメリカ最大規模の原初国家からの影響をマヤ小政体群は受けていたと考えられている。

そのため古典期は大部分のマヤ政体にとっての二次国家形成期として捉えることができ、特に古典期前期後半に強く見られる「テオティワカンの影響」はマヤ社会全体に大きな影響を及ぼしたと考えられている。5 章ではこの「テオティワカンの影響」という現象と社会変化に関して考古学と碑文学のそれぞれの観点から整理し、当該時期のマヤ社会における国家形成の研究が抱える問題点を抽出、提示した。結果として本論では古代マヤ社会における国家形成期を二段階に分けて捉え、古典期初頭までの原初国家形成期と古典期を通した二次国家形成期としてそれぞれの時期を評価すること、そして後者の二次国家形成期を古典期前期に生じた「テオティワカンの影響」という異文化接触と関連付けて評価することが重要であると結論付け、本論の骨子を示した。

続く II 部、III 部にて各種のテオティワカン様式遺物を取り扱った分析を行い、「テオティワカンの影響」の実態を明らかにした上で、本論では最終的に「テオティワカンの影響」という異文化接触とそこから始まるティカルによる同盟勢力の拡大政策との関連の中で古典期前期をマヤ社会全体における二次国家形成期として評価する視点を提示した。

II 部では「三足円筒土器の研究」と題し、グアテマラを中心として出土した三足円筒土器資料に対して実見による資料化作業を行った上で分析を行った。分析の一つとして三足円筒土器類の分析を通して、三足円筒土器類の時間的・空間的な広がりと変化を明

らかにした。これにより各マヤ小地域において特有の様式差を具体的に認めることができた。一方で形態的特徴や器面調整技術、装飾技法の点でテオティワカンとの強い類似性を有するマヤ南部域とオリジナルの三足円筒土器からの変異が大きいマヤ低地域の二者に区分することができた。このことはマヤ南部域において「テオティワカンの影響」という現象の背後にテオティワカンからのヒトの移動を示唆するものであると結論付けた。

また他の分析としてマヤ地域における三足円筒土器の時間的な変化について検討を行った。「テオティワカンの影響」が生じる古典期前期後半(A.D.350-600)という限られた時間内における三足円筒土器の「変容」については、従来のタイプ-ヴァラエティ法による時期区分では扱うことができない。これに対してパトリック・カルバートはティカルにおける事例を取り上げ、マヤ地域で唯一暦年の判る時間的に連続する王墓群とそこに副葬された三足円筒土器群を対象として、三足円筒土器の器形に着目し、古典期前期後半という期間における三足円筒土器の時間的な変化について指摘している。このIII部の分析の後半部では最初にカルバートが示した古典期前期後半における三足円筒土器の器形の変化についての検討を行い、それを起点としてテオティワカン様式遺物の一つである三足円筒土器がマヤ地域でいかにして「出現」し、「変容」し、「消失・残存」していくのか、また古典期後期の土器様式に対してどのような点を「継承」しているのかを明らかにした。

III部では三足円筒土器以外の「テオティワカン様式遺物」として1章にて高台付き碗、にて2章にて三足円筒土器や高台付き碗に付属する蓋、3章にてシアタータイプ土器、4章にてタルー・タブレロ建築についてそれぞれ取り扱った。

高台付き碗と蓋では、三足円筒土器と同様に「マヤ的」な資料と「テオティワカン的」な資料に区分可能であり、かつ前者ティカルを中心とするマヤ中部低地域に分布し、後者はカミナルフユを中心とするマヤ南部高地に分布することが明らかとなった。他方でシアタータイプ土器は明らかに「テオティワカン的」な遺物であり、マヤ南部高地域にのみ分布することが確認できた。これらのことから「テオティワカン様式」と一括に表現される遺物にはその諸特徴から、オリジナルであるテオティワカン産の遺物そのものあるいはその諸特徴の多くを受け継いでいる「テオティワカン的」な遺物と、オリジナルの遺物を模倣しながらも独自のアレンジを加えた「マヤ的」な遺物が含まれることが分かった。

こうした結果は、「テオティワカン人の到着」というイベント、そして「テオティワカンの影響」という物質文化面における現象を理解する上で重要な示唆を与えるものである。1点目にテオティワカン人が直接的に到着し、支配した領域はマヤ南部高地や太平洋岸域といった南の地域だけである蓋然性が高いということである。一方でティカルの碑文に現れているように、ティカルにテオティワカン人戦士が到着したのであれば、それは戦士集団のみであり、工人集団を含む大規模な人の移動はなかった蓋然性が高い。

そうした中で「マヤ的」なテオティワカン様式遺物がマヤ中部低地を中心として分布するのはテオティワカンの間接的な支配を受けた新体制のティカルによって、周辺都市への派兵と王の樹立（二次国家形成）が行われ、ティカルを盟主とする都市国家同盟のメンバーシップの象徴としてティカルなどで模倣製作された品が分配されたためである蓋然性が高いと結論付けた。

IV 部は「検討と結論」である。I 部で見てきたように、マヤ文字の解読が進展することで古典期マヤ文明は『歴史時代』の文明社会となり、現在のマヤ学における碑文学研究の立場は非常に強いものとなっている。特に碑文学研究者であるサイモン・マーティンらによって提示された、ティカルにおける 378 年の「異国人の到着」の出来事を契機としたマヤ諸都市間の戦乱と盛衰によって描かれるダイナミックな歴史観は、「テオティワカンの影響」に深く関係した古典期マヤ文明史観として主流となっている。

一方、考古学研究ではマヤ地域における「テオティワカンの影響」に関する多様性を見出してきた。各種の「テオティワカン様式遺物・遺構」のバリエーションやそれらの組み合わせに見られる多様性は、マヤ地域における各都市が外部の影響を受容するに際して多様な方法・過程があったのだろうと結論付けてきた。それは各種の特定の遺物・遺構の存在が、ただちに征服や異国人の居住を示す根拠にならないとの主張でもあり、碑文学研究成果との対立が見られる。

古典期前期マヤにおける「テオティワカンの影響」に関する研究が内包する問題は、考古学研究と碑文学研究の齟齬である。また考古学研究において示された各地域あるいは各都市に見られる多様性が何故生じるのかについて解釈が及ばず、各研究者が担当する調査遺跡の『固有性・独自性』を誇示するような結論に終始することが大きな問題である。

この章ではこれまでに主流となってきた碑文学研究成果と、II 部・III 部で個別の「テオティワカン様式の遺物・遺構」の分析から明らかにしてきた「テオティワカンの影響」の実態に関する結論を総合し、マヤ地域における全体的な「テオティワカンの影響」の実態とこの現象と密接に結びついた古典期前期における二次国家形成過程について検討を行った。

まず古典期前期における「テオティワカンの影響」と二次国家形成に関して、これまでの研究では「テオティワカンの影響」に関してテオティワカンとマヤ諸都市との対比において議論されてきた。カミナルフユ等のマヤ南部地域を経由したモデルも提示されたが、テオティワカンによって征服され飛び領地化したと考えられるそれらの都市からの他のマヤ諸都市への影響とは結局テオティワカンとマヤ諸都市という対比の範疇を出なかった。しかし本論における全てのテオティワカン様式の遺物・遺構の分析結果から「テオティワカンの影響」とは単純な拡散方法でなく、以下の３パターンに分けて捉えることができる。

①テオティワカンによって直接的に伝達
　a. 工人を含むテオティワカン人の大規模な流入による伝達
　b. エリート層の人間のみが変化することによる情報としての伝達

②ティカルからの間接的な伝達

③テオティワカンあるいは周辺の都市からモノや情報として伝達

①a の伝達方法はマヤ太平洋岸やマヤ南部高地に見られ、そこで見られるテオティワカン様式の遺物・遺構はテオティワカンにおける典型例との類似性が強く、また搬入品の量も比較的多い。③は古典期前期末以降の北部低地における事例を主対象としているが、ネットワーク社会であったマヤ社会においては、ティカルやカミナルフユを含む複数の都市との社会経済的交流の中で常時このような伝達方法が機能したと考えられる。

本論で最も重要な伝達方法は②のティカルからの間接的な伝達である。これまでの研究ではマヤ地域、特にマヤ低地におけるテオティワカン様式の遺物・遺構の斉一性の説明がなされてこなかった。本論で明らかとなった「テオティワカンの影響」の実態とはマヤ南部域へのテオティワカンによる直接的な影響と、マヤ低地域におけるティカルによる間接的な影響の二者があったことである。この意味でこれまでマヤ的と表現されてきたテオティワカン様式遺物・遺構の広がりとは「テオティワカンの影響」というよりはむしろ「ティカルの影響」である。

本論では古代マヤ社会における国家形成を 2 期に分けて、第一国家形成期を先古典期後期から古典期初頭にかけての原初国家形成期として、第二国家形成期を古典期初頭以降の二次国家形成期として捉える視点を提示した。この二次国家の形成期である古典期では、特に古典期前期後半において「テオティワカンの影響」という当時のメソアメリカ最大の異文化国家の影響力の下で加速的に二次国家が生じたと考えられる。この二次国家形成に関して中心的役割を果たしたのがティカルであり、ティカルが「新体制」下で精力的に行った新王の擁立を伴う同盟勢力の急速な拡大とマヤ的なテオティワカン様式の遺物・遺構の広がりが一致する蓋然性が高い。

ティカルが「異国人の到着」によって、新たにテオティワカン-マヤ王朝として同盟勢力を拡大する過程で同盟のメンバーシップを表象するものとしてティカルで製作された独自のテオティワカン-マヤ様式の各種遺物を提供したのであれば、それらの遺物がオリジナルであるテオティワカンの資料とは大きく異なる点、それらの遺物がマヤ低地域において大きな偏在性を有する点、それらの遺物がマヤ低地域内にて強い斉一性を有する点の説明が可能である。

あるいはこのティカルによって拡散されたと考えられるテオティワカン-マヤ様式遺物・遺構はテオティワカンとの関係を象徴する「物質化したイデオロギー」としての機能を有していた可能性がある。古典期前期段階で銀河系構造を有したと考えられるティカル都市国家連合は模範的国家儀礼を権力基盤とした分散的な支配による動的な社会集団であったと想定されている。そのような当該時期のティカルという古代国家が動的な同盟関係を維持するための権力基盤としてテオティワカン-マヤ様式遺物・遺構という物質化したイデオロギーを統御する「儀礼の管理」(福永 2005: 288-289; Earl 1997) が一つの政治的戦略として機能した蓋然性がある。つまり碑文学研究で指摘されてきた古典期前期における新体制のティカルによる王朝システムの拡大と「テオティワカンの影響」という物質的な広がりとが相関関係にあり、中央であるティカルによる統合儀礼管理の一要素としてマヤ低地域におけるテオティワカン様式遺物・遺構の分布が古典期前期における急速な二次国家形成のプロセスを反映しているのであると結論付けた。

終章では、まとめと展望について記述した。現行の古代マヤ文明観では古典期における都市国家の数は少なくとも 30 以上とされ、研究者によっては 100 程度と推定されている。そのような中、古代マヤ社会の国家形成期は先古典期後期から古典期初頭にかけてであり、古典期初頭までにティカルとカラクムルが初期国家段階に移行したと考えられてきた。一方で国家形成期以降の古典期において大多数の社会集団のための国家形成過程については言及されてこなかった。これは古典期前期における「テオティワカンの影響」の研究において、“大国テオティワカンと未開のマヤ社会”という対比において語られた“旧”二次国家形成論の登場とその否定の影響を受けているだろう。この二次国家形成論の否定以降、「テオティワカンの影響」に関する研究はテオティワカンとマヤ社会の諸関係、特にマヤ地域の各都市に対するテオティワカンによる征服・非征服に重点が置かれ、「テオティワカンの影響」という現象の解釈を古典期前期における国家形成に対する一つの指標として扱うことはなかった。

本論の特色と成果とは、一つ目に古代マヤ史における国家形成形成期を従来言及されてきた先古典期後期から古典期初頭にかけての第一次国家形成期と古典期前期以降の第二次国家形成期に分けて捉える視点を提示したことであり、二つ目に「テオティワカンの影響」の実態を解明し、その解釈を古典期マヤ社会における二次国家形成と結びつけたことである。本論で提示する古代マヤ社会の国家形成過程では、古典期初頭までにティカルとカラクムルが原初国家として成立し、続く古典期の中で多数のマヤ小政体が二次国家として成立したと考える。この古典期の中での二次国家形成はかつて否定されたテオティワカンとマヤとの対比ではなく、他に先んじて初期国家段階に到達したティカル、カラクムルと他の多数のマヤ小政体との間の諸関係によって生じた二次国家形成であり、特に古典期前期の「テオティワカンの影響」下においてテ

ィカルが行った対外政策としての急速な同盟勢力の拡大によってマヤ社会全体における二次国家形成が加速的に生じたと考える。

「テオティワカンの影響」に関する考古学的なデータは未だ数量的に少なく、マヤ地域全体では各都市における発掘調査の実施度合いに大きな偏りが見られる。本論では中でも比較的情報量の多いティカルとその関係諸都市を取り扱ったが、今後の調査の進展によって敵対勢力であるカラクムルとその関係諸都市に関する分析が必要となる。またテオティワカンとマヤという広い範囲同士の対比の中での遺物の搬入・模倣について取り扱ったが、本論で言及したティカルを中心とする政治的戦略としての「テオティワカンの影響」の検討やその証明のためには、マヤ中部低地という狭い範囲内における遺物の搬入・模倣の判定を可能とするようなより詳細な分析を推し進めていくことが必要となる。またこの問題を乗り越えるための方法の一つとして、マヤ土器研究における課題である土器生産体制の理解、都市周辺の粘土の分布の把握、そして粘土と土器の胎土との関係に関する分析を併せて行うことが重要であり、本論のテーマに関する研究を深めていく上での展望としたい、として終わりとした。